



リスペクトプロジェクト 新たな取り組み

～ 「リスペクト FC JAPAN」 のキックオフ～



リスペクトプロジェクトの新たな取り組みとして、「リスペクトFC JAPAN」を開設することとなり、9月3日、日本サッカーミュージアム内のバーチャルスタジアムで、「FIFAフェアプレーデイズ2011」にちなんでキックオフイベントを開催しました。当日は、台風12号の影響のある中、47都道府県サッカー協会、一般募

集（指導者、審判、一般へ広報）、メディアの皆さまを含め、100名以上の方々にお集まりいただきました。

イベントは2部構成で、第1部として「リスペクトFC JAPANキックオフ宣言」、第2部として「シンポジウム『リスペクトを考える』」を行いました。

リスペクトプログラムの先進国であるイングランドサッカー協会からリスペクトマネージャーのDermot Collins氏をお招きして参加していただきました。

この日より開設されたリスペクトFC JAPANの説明、入部のご案内をさせていただき、当日も多くの方の入部をいただきました。今後、皆さんと共に、時間をかけてこのFCを大きく育てていきたいと考えています。下記概要をご参照いただくとともに、ホームページ (<http://respectfc.jp/>) をのぞいてみていただければと思います。

第1部 リスペクトFC JAPAN キックオフ

リスペクトFC JAPAN キックオフ宣言	リスペクトFC JAPAN 会長 小倉純二
趣旨・経緯説明	リスペクトFC JAPAN GM 田嶋幸三
メンバーからのメッセージ (ビデオメッセージ)	アルベルト・ザッケローニ監督、澤穂希、宮間あや、西村雄一、長谷部誠
リスペクトFC JAPAN 概要説明	

第2部 シンポジウム リスペクトを考える

パネラー	松崎康弘 (JFA リスペクトプロジェクトリーダー)
	田嶋幸三 (リスペクトFC JAPAN GM)
	吉武博文 (前 U-17 日本代表 / 現 U-15 日本代表監督)
	有田靖 (福岡県行橋南小学校教諭) 学校教育での実践例から
	西村侑真 (ソレック熊本ヴィットーリア選手) 第34回全日本少年サッカー大会選手宣誓
	Dermot Collins (イングランドサッカー協会リスペクトマネージャー)

「リスペクトFC JAPAN」概要

■ 設立の趣旨・目的

JFA、Jリーグでは、サッカー、スポーツの社会的役割を強く自覚し、2008年度より、サッカー界におけるリスペクトの重要性を認識し、リスペクトプロジェクトを開始しました。リスペクトを「大切に思うこと」とし、サッカー界に



気付きから参加、行動へ

- 賛同の意思表示
- 連帯感
- 参加、行動 仲間を増やす

リスペクトFC JAPANの約束

リスペクトFC JAPANの一員として、

- **ENJOY** サッカーを楽しむことを誓います
相手、審判をはじめとし、支えてくれるいろいろな人がいて初めて楽しむことができます。全てのものを大切に思います。
- **VALUE** リスペクトのこころを育て、大切にすることを誓います
サッカーの価値をより高めていきます。
- **ACTION** より多くの仲間を増やしていくことを誓います
リスペクトのこころを担うクラブの一員として、こころを行動に移し、伝えていきます。



おけるリスペクトの認知の浸透に、大会時のプロモーション、審判員によるワッペン装着、指導者養成、その他さまざまな方法で努めてきました。その成果があって、認知は広まってきています。

それをさらに展開していくために、第二段階として、参加型の場を設定することで、賛同の意思表示をする場をつくり、連帯感をもって、より広め、深めていきたいと考え、FIFAフェアプレーデイズ2011に合わせて9月3日に、リスペクトFC JAPANを開設することとなりました。クラブ員には、行動で示すこと、仲間を増やすことを、日常の活動において意識していただきたいと考えています。

この機会に、選手、指導者、審判員ばかりでなく、保護者、大会関係者、ファンその他、多くの関わる人たちに触れたいと考えています。さらにサッカー、スポーツを越え、より大きな広がりをもてるようにしていきたいと考えています。他競技や、スポーツ以外の分野とも広く関わりをもつことができ、多くの人々と出会い、つながりをもてることを期待しています。

■「リスペクトFC JAPAN」概要

<http://respectfc.jp/>

「フットボールクラブ」を想定

フットボールクラブを想定し、「クラブハウス」としてホームページを持ちます。

コードオブコンダクト

リスペクトFCジャパンの約束

FC設立の趣旨・目的・行動規範(クラブの約束事)に賛同する人に、入部していただきます。個人、グループ/チーム、リーグの3カテゴリーがあります。

リーグというカテゴリーを設けましたが、これは、現在全国で育成年代から各カテゴリー、全国、9地域、47都道府県、地区とリーグを整備していますが、その中でリーグとしてリスペクトを目指す、ということが出てきていただければと考えたものです。リスペクトFCのアイデアは、元々イングランドサッカー協会の事例から得たものですが、イングランドでもリーグとしてリスペクトにサインアップして取

り組むという活動を行っています。

個人、グループ/チーム、リーグで、同一の方が重複して入っていただいても構いません。さまざまな場でそれぞれリスペクトについて、何が行動できるかをぜひ考えていただければと思っています。

クラブ員となる、連帯感を持つ

入部者(賛同者)の数をトップページに出していくとともに、入部者には証書をダウンロードできるようにし、クラブ員の名簿を掲出します。リスペクトを広め、どんどん仲間を増やしていくことを目指します。

クラブ員からのメッセージ

FC会長、その他、さまざまなクラブ員からのメッセージを示していきます。

参加型企画

①事例報告、投稿

クラブ員から、リスペクトに関わる活動や、見つけたリスペクト、リスペクトをめぐる想い等を、小品として投稿していただき、掲出します。現在あるリスペクトのハンドブックの1ページのようなイメージを想定しています。簡単なテキストと、写真やイラスト等、自由にお考えいただければと思います。

年に1回、優秀作品を選んでアワードにつなげることを計画しています。

②トピックについての意見交換

委員会活動(例:部員勧誘促進委員会、キャプテン会議、保護者会等)を模して、有志参加で意見を交換していただけます。全般についてフリーに、というよりも、リスペクトに関わるさまざまなトピックを少し取り上げる形で、より深く具体的に、ポジティブで建設的な意見交換の場ができることを期待しています。

用具を使って部員を増やす

クラブ員はFCの器具庫から、さまざまなツール(リスペクトハンドブック、リーフレット、ロゴ、バナー、その他、保護者や大人の関わりに関するハンドブック、等)を活用可とします。それらを活用して、さらに仲間を増やし

ていただきたいと考えています。

器具庫にはカギがあります。リスペクトに賛同いただけるクラブ員であれば簡単に分かるカギになっていますので、ぜひ開けて中の用具を有効に活用していただければと思います。用具も随時増やしていきたいと考えています。

想いを共感し互いをリスペクトする

「想いを想う」というコーナーで、サッカーに関わるさまざまな人の想いや苦勞を共感するために、それぞれにフォーカスした小品を、ホームページ上で紹介していきます。この互いの共感が、リスペクトの重要な要素であると考えています(若手コーチ、ユース審判、お父さんコーチ、保護者、大会役員、等)。

ハンドブック「合言葉はプレーヤーズファースト」はこの考え方を基本として、子どもたちのサッカー環境に関わる大人が互いに共感し、協力して役割を果たし、良い環境をつくっていきましょう、ということまで以前作成したものですので、ぜひそちらもご覧ください。

世界の仲間たち ～海外の事例報告～

リスペクトプロジェクトの海外の取り組みを報告していきます。リスペクトは世界中で取り組まれているものです。リスペクト先進国であるイングランドサッカー協会をはじめ、さまざまなアイデアが実施されています。それらを紹介しつつ、私たちFC JAPANの活動の充実にも参考にさせていただきます。

その他

その他、さまざまな企画を考えていきます。クラブ員からの提案も大歓迎です。クラブ員の皆さんと協力して、このリスペクトFC JAPANを大きく育てていきたいと思っています。

ぜひ、賛同いただける方は入部をお願いします。そして行動し、ぜひ仲間を、サッカー、スポーツ、さらにそれを越えて、増やしていきたいと考えています。どうぞよろしく願いいたします。

キックオフ宣言

リスペクトFC JAPAN会長 小倉純二

リスペクトFC JAPANが発足することを宣言させていただきます。

今、非常に難しい世の中になっていますが、そういう中で、スポーツの持つ意味というのがますます重要になってきていると思っています。今年は東日本大震災があり、日本は困難な状況にあります。その中で、8月になでしこジャパンがワールドチャンピオンになり、日本の皆さんがいかにも喜んでくださったか。国民栄誉賞までいただいたということは、我々サッカーというスポーツが、重要な役割を果たしたからではないかと思っています。それは本当にうれしいことです。それと同時に、なでしこジャパンはチャンピオンだけでなく、フェアプレー賞もとりました。その少し前にメキシコで行われたU-17ワールドカップでも、今まで日本が勝ち上がったことのないベスト8になり、同時にフェアプレー賞もとったのです。FIFA



リスペクト FC JAPAN のキックオフ宣言をする
小倉純二 JFA 会長 © Jリーグフォト

の大会でU-17の大会、そして女子のワールドカップで連続してフェアプレー賞をとったということ、そういう意味では、日本はフェアプレーのために頑張ったと言えると思いますし、それを誇りに思っていると思います。両方とも最高峰のワールドカップという厳しい戦いが続く中でフェアプレー賞を連続してとったのは大変素晴らしいことだと思っています。

今日、リスペクトFC JAPANが設立できるというのは、非常に意味のあるタイミングではないかと思っています。何かと申しますと、今アジアの中で八百長問題やアンフェアなことでもさまざまな問題が起こっています。幸い我々はそんな問題に直面してはいませんが、そういう状況にならないとは限りません。そういう意味では、我々リスペクトFC JAPANが頑張っていく必要があるのではないかと。今日にリスペクトFCを作って日本が諸外国に先駆けて積

■メンバーからのメッセージ

リスペクトFC JAPAN トップチーム監督
アルベルト・ザッケローニ

まずはこのような素晴らしいチームの監督に任命されたことに誇りを感じています。

“リスペクト”とは社会においても非常に大切です。こと人種の違い、文化の違い、宗教の違い等の垣根を越えて行われるサッカーというスポーツにおいてはより大切なものになります。

競技規則に対して、チームメイトについて、対戦相手についてリスペクトを払うという点では、我々は良い模範となれるのではないかと思

極的に取り組んでいくということは非常に重要なことであると考えています。

日本は、なでしこに証明されるようにフェアな戦いをして、その上で勝つということですから、我々も今後はフェアプレーで、そして強い日本ということを旗印に、リスペクトFCのもとに頑張っていければいいと思います。

世界で最も愛されているスポーツであるサッカーに関われることを喜び、サッカーを楽しみ、最善を尽くして勝利を目指したいものです。このことを、広くサッカー界に、そしてひいては、他のスポーツ、あるいはスポーツ以外の皆さんとも、ぜひ共有していきたいと考えています。

ぜひ皆さんと一緒にこのリスペクトFC JAPANのクラブ員を増やし、皆で活動していければ、日本のフェアな戦いがこれからも高く評価されるのではないかと思います。ぜひよろしくお願ひします。

います。また自分たちの言動、行動を通じてポジティブなメッセージを発信できればと思います。

そういった“リスペクトを持つ”という意味では、この日本のリスペクトFCは素晴らしいチームですし、世界最強とも言えると思います。

日本で生活していく中で、そのリスペクトの気持ちはサッカーという競技内だけでなく、日常生活にも溢れているもので、相手を尊重する気持ちという日本の文化は素晴らしいと思います。

我々リスペクトFCがピッチの中でも外でもサポーターの皆さんと共にリスペクトの気持ちを持ってやっていけると私は確信しています。

経緯・趣旨説明

リスペクトFC JAPAN GM 田嶋幸三

2009年に我々はリスペクトプロジェクトを開始しました。その前段としては、リスペクトプログラムを、JFAだけでなくJリーグと共同で開始しました。Jリーグは地域に密着しているということを考えるならば、プロスポーツがロールモデルとなって、その地域にリスペクトの精神を根付かせていこうということで、我々は立ち上げました。

前後して世界各国でも、このリスペクトに対するさまざまなプロジェクトが展開されてきています。

今さまざまな国でもリスペクトのプロジェクトが展開されています。特にヨーロッパでは、その活動が盛んに行われています。これは、よりサッカー、そしてスポーツがその国における価値、影響力が高い国ほど、そういうものに貢献しているのではないかとと思っています。サッ

カー、スポーツの役割というもの、本当に国や社会にとって大きな影響力を持つようになってきています。それくらい私たちスポーツに関わる者には責任があるということ、実感しなければいけないと考えています。そういう意味からも、日本でも、Jリーグと協力してリスペクトプロジェクトを展開していくことは、まさに我々としてやっていかなければならないことだと思っています。

特に最近の傾向として、今、トップレベルの試合の中継は、20~30台のカメラがスタジアム内、ピッチの上、それ以外も撮っています。ということが起こるかということ、以前は、シャツを知らないところで見つからないように引っ張ってやるのが良い選手の一つの行為であるとか、マリーシアであるとか、マリーシアというのは、本当は違った意味で使われているのですが、何かずるがしこいことをすることがあつかも良い選手の象徴であるかのように言う時代もありました。そういう時代でも我々はフェアプレーを実践することを曲げませ

んでした。そして今、カメラが何十台もある中で、嘘はつけなくなっています。最近の例で言えば、フランス代表がアイルランドと試合をした2010年ワールドカップ予選では、明らかなハンドでゴールになった。その後どうもフランス国内でもその行為に対する賛否がかなり議論され、そしてそれが尾を引くかのように、2010年ワールドカップでは、フランス代表チームは力を発揮することができなかった。あそこでハンドをしたアンリ選手が、今のは得点ではありません、と言ったらどうなったのか、それは誰にも分かりませんが、今本当にフェアプレーの精神を、社会の模範となるべきプロの選手が実行していくということは、社会のフェアプレーにも通じていくということだと私たちは考えています。

ぜひ皆さん今日このミュージアムのB2に行ってみてください。本当にフェアプレーロフィーがたくさんあります。1968年メキシコオリンピックでのフェアプレー賞から始まり、本当に多くのフェアプレーロフィーを私たちは



獲得してきました。70年代、80年代、日本が勝てない時代、私がちょうど代表等でプレーしていたときに、アジアの他の強国から、「日本はフェアプレー賞だけを狙っているのではないか」などと揶揄（やゆ）される時代がありました。そういう時代を経て、私たちはアジアのチャンピオンになり、そして女子はワールドチャンピオンになって、なおかつこのフェアプレー賞をとることができる。これは誇りです。もちろんなでこのワールドカップも素晴らしいことですが、ここに置いてあるこの多くのフェアプレー賞は、日本サッカーの誇りではないかと思えます。そういう意味でも、このフェアプレーを本当に浸透させ、世界に出ても恥ずかしくないプレーヤーを育てていくことが我々の役目です。日本が世界の中でもリスペクトの先進国になれる、そういう時代を我々は目指したいと思っています。

日本はフェアに闘い、そして実力もつけてまいりました。そのベースになるのが「JFA2005年宣言」。私はいつもこの名刺サイズのカードを身につけています。この2005年宣言の中には、スポーツを文化にする、そしてフェアプレーの精神を我々が実行することによって国際社会や日本の社会に貢献ということをうたっています。これがやはりベースになって、我々はこのリスペクトプロジェクトを展開して



いるのです。

この他にも、グリーンカード。これは良いことをしたら褒めよう、感謝を表現しようということで、2003年から始めたものです。少年サッカーでは公式戦で使用しています。始めた当時は慣れていなくて出し方もよく分からず、なかなか出せなかったのですが、今はほとんど出せるようになりました。それくらい良いことがどんどん褒められるようになりました。その他にも1人制審判であったり、保護者向けのハンドブック「めざせベストサポーター」であったり、大会に関わる大人に向けたハンドブック「合言葉はプレーヤーズファースト」であったり、さまざまなものを展開して、我々はこのリスペクトという考え方、これを「大切に思うこと」という言葉に変えて展開してきています。このリスペクトの認識は高まってきているのではないかと思います。

このタイミング、特に1921年にこのサッカー協会が創立され、創立90周年、そしてFIFAのフェアプレー週間があるこの日にこのリスペクトFC JAPANを創設することができ



たということは、本当にすばらしいタイミングではないかと思っています。

このリスペクトFC JAPANに関しましては、The FA、イングランドサッカー協会から本日 Dermot Collinsさんにお越しいただいていますが、リスペクトプログラムの先進国であるThe FAで行っているリスペクトFCのさまざまなノウハウを我々は参考にさせていただきました。8月末に小倉会長自らウェンブリースタジアムに行き、我々のサッカー協会の創設のきっかけとなった「カップ」をいただいてまいりました。このカップは戦争の際に貴金属として供出してしまい、失われていたカップをイングランドサッカー協会が再度つくって寄贈していただきました。これこそ、歴史へのリスペクトの結果ではないかと思えます。

我々はこのリスペクトプログラムをぜひ日本中に浸透させていきたいと思っていますし、そして、全てのものを大切にするという考え方を、日本から世界へも発信していきたいと思っています。

イングランドサッカー協会でのリスペクトの取り組みについて

イングランドサッカー協会リスペクトマネージャー Dermot Collins氏

今回お招きいただき、我々のリスペクトに関する取り組み、経験を日本の皆さんと共有できることを大変光栄に思っています。

イングランドでは、日本のアジアサッカーにおける実力やリーダーシップについて、またJリーグの人気、そして女子チームのワールドカップでの成功について認識しています。

また、3月の大震災での津波の被害をお見舞い申し上げます。日本人の持つ特徴を考えたときに、日本が今までの歴史で証明してきたように、皆さんは必ずやそこから復興されると強く信じています。

私のプレゼンテーションは、我々イングランドサッカー文化の中における経験です。皆さんはすでに皆さんのものを立ち上げていらっしゃいます。その中で我々の経験からいくつかご参考になるレッスンがあれば、皆さんのお役に立てるとうれしいと思っています。

私がこれから行うプレゼンテーションでは、イングランドサッカーにおける悪い面についてご紹介せざるを得ない内容になっています。それを皆さんには、イングランドのサッカーが危機的な状況にあるとお考えいただきたくはない

と考えています。基本的にサッカーは十分に楽しまれています。しかし、いくつか着目し、リスペクトプログラムで取り組まなければならない問題はあります。

まず、なぜ我々がリスペクトプログラムを開始したか、何をしたか、リスペクトプログラムに取り組み始めて3年がたちましたが、どのような効果が表れているか、そして、得られたレッスンについてお話ししたいと思います。

イングランドでは、リスペクトプログラムを2008年に開始しました。なぜならサッカーのさまざまなレベルで問題が起きていたからです。プロのゲームでは、プレーヤーが集団になってレフェリーを取り囲み、判定を覆そうとしたり、侮辱したりしていました。レフェリーに対する異議の数が増大していました。プレミアリーグへの関心の高さから、そのような事例があるたびに世界中で放映され、世界中何百万もの人々が悪い例としてそれを目にするような状況でした。次第にプレーヤーが現実から離れてしまい、そうした状況に対し、我々イングランドサッカー協会やリーグで何か手をうたなくてはならないという判断をして始めることとなりました。

た。

ユースサッカーに目を移してみると、イングランドではユースサッカーが急成長を遂げており、数多くのクラブやリーグが生まれています。この成長は、大人のボランティアによって成り立っています。大人の多くは良識を持って取り組んでいただいているのですが、一方で、一部、子どもたちのサッカーの中でふさわしくない行動をとる大人、大人の世界を子どもたちに押し付けようとしている大人たちが実際にいます。子どもたちのサッカーは本来楽しいもので、テクニックを身につけるチャンスを得るためのものですが、大人の押し付けによって、勝敗が全て、といったものになってしまうケースがありました。サイドライン上にたくさんの親御さんが観に来ていて、本当は1人のコーチが指示を出すべきところ、まるで50人、60人、70人もコーチがいて指示を出しているかのような状況になっているところもありました。

もう一点としては、大人たちがレフェリーに対して悪い態度をとることで、子どもたちがそれをまねて同じような態度をとってしまうようになるという状況も生まれました。アマチュアゲームにおいては、大多数のレフェリーがゲーム中にプレーヤーからの批判を経験しています。そのことによって、レフェリーが継続してい



イングランドサッカー協会リスペクトマネージャーの Dermot Collins 氏 © Jリーグフォト

くこと、新たなレフェリーをリクルートしていくことに、非常に悪い影響を与えています。日本では審判が20万人を超えるというすばらしい数字を示していると聞いています。イングランドでは、2008年の時点で、レフェリーは22,000人にすぎません。これでは単純に試合に対応できるだけの審判が足りません。我々は、レフェリーがいなくてゲームがどうなってしまうのか、人々に認識してもらう必要があると考え、映像を作成しました。ご覧になるとお気付きかと思いますが、この中には、ワールドカップ決勝を担当したレフェリーや、イングランド代表監督であるファビオ・カペッロにも出演してもらい、影響力の強いものを作成してもらいました。

このように我々はプロのゲーム、アマチュアゲーム、ユースゲームに問題を抱え、そしてその結果として審判を増やし、また維持することに問題を抱えていました。そのため、我々は2009年シーズンより、リスペクトプログラムを開始したという経緯です。

これらの問題に取り組むために、我々はさまざまな観点からの取り組みに着手しました。スライドに示した通りです。この中のいくつかについてご説明します。

サッカーをめぐるポジティブな雰囲気をもたらすために、さまざまなリスペクト施策を講じました。

この問題に対して何かさらなるルールを考えるのではなく、審判に対し、すでに持っている役割を確実に果たすためにもっと勇気づけ、激励をしていくことが必要と考えました。キャプテンに重要な役割を与えました。審判をアシストし、ピッチ上でチームメイトの行動に責任を持たせるようにしました。

プロのゲームにおいては、キャプテン、マネージャー、レフェリーが試合前にミーティングを行い、このときに協力関係を確立するようにしています。それ以前は、プレーヤーやキャプテンがレフェリーと接することはありませんでした。また、プレミアリーグ、チャンピオンズリーグで、常に両チームの握手を行っています。これはスポーツであり、戦争ではない、という意味を込めています。

アマチュアゲームにおいてもいくつか同じ取

り組みを行っていますが、こちらではさらに、コードオブコンダクト（行動規範）をとり入れています。プレーヤーがどのように振る舞うべきか、もしもこれに反した場合にはどうするか、といったことを記載しています。

ユースサッカーにおいては、観戦者エリア制限を行っています。観戦者はタッチラインから遠ざけ、コーチはコーチに任せ、保護者が子どもたちにゲーム中に影響を与えることを避けるようにしました。この他にも、コーチや保護者のための、さまざまな啓発のためのツールを作成しました。彼らに子どもたちがどのようにサッカーを楽しむべきであるのかを理解してもらうためのものです。

リスペクトプログラムを実施していく中で、その結果行動に変化はあったのか、という質問を受けます。我々は変化をモニタリングする必要があります。さまざまな観点から、行動の変化を評価するようにしています。

イングランドにおいては、プレミアリーグが成功しており人気が高いため、このプログラムを推進していくにあっても、プレミアリーグをはじめ、フットボールリーグ、選手協会および監督協会の協力を得ていくことが非常に重要であると考えています。彼らがトップレベルで良いモデルを確実に示すことが必要なのです。昨日、日本対DPR Koreaの試合を観ましたが、非常に印象に残ったのは、代表チームの模範的な態度、最後まで諦めない姿、チームの規律、そして最後までポジティブに応援し続けるサポーターの姿でした。これらがなければ、試合終了間際のあのゴールは生み出されなかったのではないかと思います。

皆さんに確実に我々がやりたいことを理解してもらうために、レフェリーと指導者の研修の内容を変更しました。新たに資格をとるレフェリー、指導者には全員、リスペクトについて理解してもらうようにしました。

リスペクトをプロモーションしていくための施策として我々がやっているものの一つに、ナショナルリスペクトアワードがあります。これはプロレベルから、アマチュア、ユースに至るまで、さまざまなクラブ、リーグを対象としたものです。アワード受賞者をFAカップの決勝に招待し、そこで授賞式を行いました。初年度は

ウィリアム王子から、2年目はキャメロン首相から贈呈を行っています。そのようにして、このアワードの権威、価値を非常に高いものとして位置づけ、良い行動をさらに促進していこうとしています。

3シーズンを終え、リスペクトプログラムが行動を変化させる効果があったか、という問いに対してですが、我々は日々努力を続けなければならないし、順調にどんどん良くなっていくとは限らず、良いときもあれば悪いときもある、と認識しています。どの年も、物事が完璧にうまくいっている、ということは残念ながらまだありません。3年を終え、2008年と比較して、レフェリーの数は6,000人増えました。昨年から5%の増です。レフェリーたちの話を聞くと、以前と比べるとはるかにやりやすい、プレーヤーやマネージャーも協力的で、ハッピーである、というコメントをもらいました。

プロのゲームでの良い例としては、シニアリーグ、フットボールリーグ、プレミアリーグで異議の数が減っています。2008/09年シーズンからは16%減です。その他の違反、例えばレフェリーを取り囲む、プレーヤーの集団同士のいざこざ、これらも減っています。表には2年間の比較を示していますが、年間2,500余りの試合数から考えると、決して悪い数字ではありません。

ユースサッカーにおいても、環境は改善されてきています。大人が子どもにさせたいこと、というよりも、子ども自身が中心に置かれるようになってきています。

イングランドはワールドカップから50年以上遠ざかっています。この原因の一つとして、もっとテクニックをもったプレーヤーを育てていく必要があると考えています。子どもたちにもっとポジティブなプレー環境を与えることができれば、それが可能であると考えています。子どもたちが自信をもって自分のスキルをトライしてみることができ、もしも失敗してもそれが受け入れてもらえ、再度トライできるような環境を提供することが必要なのです。

まとめとして、JFAの取り組みについて、お祝いを申し上げたいと思います。イングランドで得た経験からのポイントをお話ししましたが、皆さんはご自分の国の文化に合った独自のものを確立していくものと思います。皆さんのお話をいろいろ聞いてきましたが、方向性、取り組んでいることに間違いはないとすぐに分かりました。イングランド協会は、いくつかの問題に対応すべく、リスペクトプログラムをスタートさせました。皆さんのスタートはすでにもっと良い位置からになっていると思います。より短い時間で達成できるのではないかと信じています。皆さんの成功をお祈りします。これから何かお役に立てることがあれば、イングランドFAはいつでも喜んでご協力したいと考えています。